江戸後期における片仮名書きロシア語の表記法をめぐって

メタデータ	言語:
	出版者: 明治大学教養論集刊行会
	公開日: 2023-12-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岩井,憲幸
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000221

明治大学教養論集　通巻五七五号（二〇二三・一二）三七―五七頁

江戸後期における片仮名書きロシア語の表記法をめぐって

岩井憲幸

はじめに　前稿では篠塚廉『北槎異聞』[注1]巻第四魯西亜語における片仮名書きロシア語の表記法につき、とりわけ後にいう引呼・促呼・合呼がどのように表記されているかを具体的に探ってみた。[注2]凡例をもたないゆえに実際に観察してみると、次のようである。

引呼：当該の文字の右側に傍線を引く。

促呼：小書きのツを用いる。

合呼：当該二文字を合書して示す。第一字は右寄せ小字、第二字は左寄せ小字を抱きあわせて一字に書いて示す。

『北槎異聞』成立直後の桂川甫周『北槎聞略』[注3]（寛政六年（一七九四）八月）では、表記法につき、凡例を有し、かつ引呼・促呼・合呼の用語も用いて、次のように表記する。

引呼：棒線〈―〉を用いる。

促呼：字下に横点〈ˉ〉を付す。

合呼：当該二文字を合書して示す。ただし第一字は左寄せ小字、第二字は右寄せ小字を抱きあわせて一字に書いて示す。

二書の間では引呼・促呼が異なるが、合呼は合書するという方式で一致している。こうした方式がどこに由来するのであろうか。どのような先例があるのであろうか。

『北槎聞略』と『和蘭訳文略』　先行研究によれば、こうした方式は蘭通詞や蘭学者が蘭語を学習する折に自然発生的に用いられてきたと説く。しかしもう少し具体的に判明しないであろうか。ことに『北槎異聞』や『北槎聞略』につながる事例はないのであろうか。

他書に拠ったが、引呼・促呼・合呼の表記法につき、『北槎聞略』の凡例は、前野良沢の『和蘭訳文略』〈題例〉を踏襲するものである。[注4] 後者は成立年未詳であるが、良沢の初期の著作とみられている。

引呼：字下に竪点〈丨〉を添える。

促呼：字の下傍に横点〈⁻〉を添える。

合呼：二字を合書する。第一字は左寄せ小字、第二字はふつうの大きさの文字で示す。

さらに引呼の方式は蘭通詞に例があり、また促呼の方式は清国の訳家に例がある、合呼の方式は良沢自身が定めたと、先例等を書き加える。これらは重要な注記と考える。さらにそれよりも良沢が表記の方式を凡例として明言している点は、注目に値するとしなければならない。まさに甫周は良沢に随っている。

周辺の資料(1)　他の資料ではどうであろうか。引呼・促呼・合呼の表記法を焦点にして調査する。

(1)天明二年（一七八二）前野良沢訳編『輿地圖編小解』[注5]はサンソンの世界新地図帖（Nicolas Sanson, *Atlas Nouveau*, ca. 1693）の内容を翻訳をまじえて簡潔に解説した地理書である。本書に凡例はみえないが、本文を検すると次のような例がでてくる。（（　）内は訳語または説明。）

タブレス　ゼオガラヒクェス（地名ノ譜）

メル　メヂテッラネエ（地中海）

合呼は合書（第一字左寄せ小字、第二字は右寄せ小字）、促呼は小書きのツと認められる。引呼は長音符〈ー〉を用いない。原本がフランス語であるが、綴りをローマ字風に読んでおり、長音は母音を示す仮名を重ねる方式をとる。

オオストフリセ（地名）

(2)森島中良の付箋を有する天明六年（一七八六）の桂川甫周國瑞譯大槻玄澤茂質校『新製地毬萬國圖説』[注6]の凡例には次のようにある。（句点のみ加える。）

＊本書は幕府が所蔵していた世界地図（Joan Blaeu, *Nova Totius Orbis Tabula*, 1648）に記された蘭文解説を翻訳したもの。この図は新井白石がシドッチを訊問した際に用いられたことでも有名。

一　直譯國字ヲ以テ音韻協諧之難キ者ハ別ニ方式ヲ立ツ。其引呼スル者ハ字下ニ竪點ヲ加フ。「ホーグ」「子ーデル」ノ如キコレナリ。其促呼スル者ハ字ノ下傍ニ横点ヲ加フ。「メ、カ」「ア、テン」ノ如キコレナリ。又両字合呼スル者ハ則チコレヲ合書ス。ウヲショノ如キ是ナリ。以テ二音ニ讀ム者ト混ゼザラシム。

この凡例は『和蘭訳文略』の〈題例〉の一条とよく似ている。いわんとする所は同じである。良沢に従っていることは明らかである。ただ横点は畳字のごとき形の〈〻〉であることが異なっているが、いずれも下傍に付す横点という点で、同じとみてよい。（、は－の変形か。）なお片仮名書きの固有名詞には「　」を施すことが、引用の条の前条

に示されているが、これも『和蘭訳文略』〈題例〉中に明言されている。いずれも次に引用する森島中良の『紅毛雑話』の凡例にひきつがれている。

(3)天明七年（一七八七）序刊森島中良編輯『紅毛雑話』[注7]の凡例中には次のようにある。（六条中後の五条を引用する。ルビは一部いかした。）

○此書中平仮名をもて書たる中に片仮名もて書たるハ紅毛語なり。猶上ミ下の文ンに混せざらんが為に。「　」かくのごとき点を懸たり。

○二字一ヂ音の仮名ハ。二字を合書（がつしよ）して一ヂ字のごとくす。「クワ」「チヤ」「シユ」などの如し。余は推て知べし。

○引呼（ひきがな）ハ。「アー」「イー」「ウー」といふが如く書たり。

○促呼（つめがな）は「カッ」「キッ」「クッ」といふが如く。ツの小字を添たり。

○摠て外國の名ハ。明人の音訳したる文字を用ゆ。さだかならざるものハ。片仮名にて書たり。

上述の三用語中、引呼・促呼があらわれるが、合呼の用語はなく〈二字一ヂ音〉と表現し、しかし合書の語は明示されている。さらに注意すべきは、合書の第一字が左寄せ小字で第二字はふつうの大きさにして、しかも一字のごとき抱きあわせ文字であることである。この書法は『和蘭訳文略』でみられたところである。巻之一での例を引用する。（合書は印刷の都合上、ニユのようにかえた）。参考のために現代オランダ語を付す。

「ヤニユワレー」　januari

「コテレット」　kotelet

(4)寛政十年（一七九八）序刊『類聚紅毛語譯』[注8]は森島中良による分類別日蘭語彙集である。その題言では『紅毛雑話』で示された片仮名書きオランダ語の表記法と同様の方式が示されている。（後半は追加。）

一　二字一音ノ假名ハ「クワ」「チヤ」ノ如ク合書シ。引呼（ヒキガナ）ハ「ハー」「マー」ノ如ク竪棒（タテボウ）ヲ書シ。促呼（ツメガナ）ハ「ハッ」「ヒッ」ノ如ク。ッヲ小書ス。一言二語ノ物ハ。分ツニ大圏ヲ用テシ。拾ヒ假名ニ讀ベキ物ハ。「ハ。ウ」「カ。ウ」ノ如ク。字間ニ小圏ヲ施シテ。ホヲ｜コヲノ音ト混ゼザラシメ。一語ノ中ニ讀（ヨミキリ）アルモノハ。梅核ヲ點ス。此編モツトモ遺漏多シ。不日ニ次編ヲ追刻シテ。足ザルヲ補フ可シ。

次の例を見よ。（蘭語は右寄せ小字で示されているが、ここではふつうの大きさに直して引用する。ゥ井は合書である。）

風	ゥ井ンド	wind
天	ヘーメル	hemel
嵐（イウ）	ロッツ	rots

刊年未詳熊秀英著『蠻語箋』[注9]は『類聚紅毛語譯』の改題本である。熊秀英は森島中良とみられ、この書は同一版本を用い、上記題言もそのまま掲載されている。

(5)中良筆記と内題に明記する『魯西亜奇語』[注10]一冊は分類別露和語彙集である。『北槎聞略』巻之十一と密接に関係する。これをひき写したとする説は誤りと考えるが、[注11]凡例を有さず、したがって合呼・促呼・引呼の表記につき述べるところはない。しかし、本文をみてゆくと『類聚紅毛語譯』と同様の表記表をとっていると認められる。（ただし合呼の表記につき、文字の大きさにはゆれがある。）ロシア語を添える。

メーセツ	月	Мѣ́сяцъ
サッポダ	西	за́падъ
シイゥヱル	北	сѣ́веръ

森島中良の『紅毛雜話』『類聚紅毛語譯』（『蠻語箋』）『魯西亜奇語』では引呼・促呼・合呼の表記法は同一である。

すなわち引呼は棒線を用い、促呼はツの小書きであり、合呼は第一字は左寄せ小字に第二字はふつうの大きさの仮名を合書する。『北槎聞略』では合呼で第一字左寄せ小字、第二字右寄せ小字という抱きあわせであるが、合書するという点では一致している。引呼は同じ、促呼は異なっている。

以上からみてくると、引呼・促呼・合呼の表記法は、良沢の『和蘭訳文略』〈題例〉に示す方式にそのもとがあることがわかる。良沢――甫周――中良という蘭学徒での継承であったとみられよう。

一方、『北槎異聞』の引呼は右傍に棒線を引く表記であることを上述したが、その前例は今のところ不明である。いずれにせよ、以上の資料では、合呼を合書するという特色を有することを強調しておく。（この一群をA群と仮称する。）

周辺の資料(2)　さて、合呼を合書するのではなく、傍線を用いて表記する別の一群の資料が存在する（B群とする）。以下ではあまり知られていない資料も扱うことから、記述が周辺に及ぶこともあるので、了解されたい。

(1)寛政四年（一七九二）九月、ロシア使節ラクスマンがネモロに来航した当初、この地で漂流民やロシア人と直接接触した折に作成されたと考えられる語彙集がある。田辺安蔵編『魯西亜語類』[注12]である。天理図書館所蔵の同書は松平定信への浄書本と判ぜられるが（以下では天理本）、その稿本は少なくとも田辺らがネモロに赴いた同年十一月から退去した翌年二月の間に成立していたのではないかと考えられる。『魯西亜語類』は現在、異名同本が二本存する。古河歴史博物館所蔵『魯西亜言語集』[注13]（以下では泉石本）と早稲田大学図書館所蔵『幸太夫　魯西亜語覺書』[注14]（以下では早大本）である。稿本との関係からは前者が興味をひく。泉石本は文化四年（一八〇七）鷹見泉石がどこからか借り出して書写したものであるが、特異なのは、通常の和本とことなり巻末から巻首にむかって記事が書かれているこ

と、さらに巻首（この書にすれば巻末になるか）に五行のロシア文字による扉が写されている点である。[注15] 扉が意味する所は〈田辺安蔵より借りて写したオロシヤ（ママ）　ゴールト　最上徳内　寛政五丑歳〉である。なお、泉石の筆写態度は精密をきわめるもので、他の資料がこれを証するが、[注16] したがって上記二点についても体裁の変更や私意の働きはないと考えられる。泉石は借りた本をそっくりそのまま写した。このことから借りた本の元の本は徳内所持本であった可能性がでてくる。それよりもこの本のさらに元の本が田辺安蔵の編著であり、どうやら稿本のもとの体裁を保持していたのではないかとも推量される。早大本はその点むしろ天理本と同じ体裁である。（なお早大本を光太夫自筆とする向きがあるが、これは誤りである。）

以下要点のみにしぼって記述する。これら三本の本体は和露語彙集である。三本ともに凡例をもたない。『北槎聞略』で引呼・促呼・合呼の表記を有する例につき、今天理本の対応をランダムにみてみる。（　）内は各々示された和語である。（ルビは省く。）

『北槎聞略』	天理本	
メーセツ（月）	メーセツ（月）	МѢ́СЯЦЪ
タ¯コ（只）	タツコ（只）	ТО́ЛЬКО
チャイ（茶）	チヤイ（茶）	ЧАЙ́

天理本では引呼では長音符を用い、促呼に小書きのツを用いずふつうの大きさに書き、合呼ではふつうの大きさの当該二文字の左に一重の傍線を付す。注意すべきは促呼も合書に含めていることである。

ウヲコ¯チ（肘）	ウヲ コツ チヱ（肘）	ЛО́КОТЬ

以上の表記法が『魯西亜語類』での通則だったと考えうる。

なお、早大本は天理本と同様とみなしうる。ただし、合呼を示す左の傍線が天理本に比して失なわれている場合が少なからず見られる。泉石本では、合呼を示す傍線は右側に付される。（前述のように本文は紙面の右から左に記されている点は考慮する必要があるかもしれない。）さらにこの傍線が付される割合が極端に少ない。これも徳内所持本がそうだったのであろう。（徳内が筆写した元の書がそうであったのか、あるいは徳内が落として筆写したかは不明としかいいようがない。）上例と同箇所を例示する。

早大本	泉石本
メーセツ（月）	メーセツ（月）
タツコ（只）	タツコ（只）
チヤイ（茶）	チヤイ（茶）
ウヨ コツ チヱ（付ヒヂ）	［原本半丁分筆写せず、なし］

＊早大本ウヨはウヲの誤写。付ヒヂは肘の誤写。

念のため、促呼を合書に含める表記法は泉石本でも同様と認められる。ただし傍線を付すことが泉石本では少ないため、例がきわめて少ないが、次例がある。

天理本	泉石本	
ゼミロコツハツト（土杯堀）	ヒミロユツ ハツト（堀）	зе́мло копа́ть/копа́ет ь

＊泉石本ヒはゼ、ユはコの誤写。

天理本にはｻ゜ｾの特別な文字がある。ﾚ゜ヤなども現われるが誤りである。

リンサ゜（狐）　лиси́ца

スゼクノ（股）　　стегно́

ともに日本人には耳なれない ца と че をふつうサとセで表わすことがあるが、天理本ではセで、те にあてられている。

＊上例は早大本で〈リシイツア・スゼクノ〉、泉石本で〈リンサ・スゼクノ〉とある。第一の例の異なりは、稿本の存在もうかがわしめる。泉石本ではサ・シ・セ・ツ・ロの文字が現われるが、セ以外は誤写によるものである。早大本ではセ・ス・ソ・テなどが散見するが、セ以外は誤写で生じた文字である。

次に内閣文庫所蔵の二本をとりあげる。凡例末に寛政八年（一七九六）と記す源有撰『魯西亜文字集』および成立年・編者未詳の『魯西亜辨語』である。この二本は同じ表装で、かつ一緒に伝存することから、成立等に密接に関係をもつとみなされている。さらに光太夫らがもたらしたロシア語がもとになっていると考えられている。便宜上、後者から述べる。

(2)『魯西亜辨語』[注17]は表・裏二冊からなり、表は主に露和、裏は和露の語彙集である。凡例はともになく、ともにロシア語は片仮名で表記される。『魯西亜語類』のはじめに引用した〈メーセツ・タツコ・チヤイ・ウヲコツ　チヱ〉の四語のうち、第三の語のみ次のような対応を示す。

チヤ―イ（茶）

よってここから引呼は棒線を用い、合呼は二文字の右に傍線を引く方式であることがわかる。他を検すると促呼は小書きのツを用いる。

トッペリヤ（今唯今之儀）　　тепе́ря

＊ тепе́ря は тепе́рь の意。

二語に分かれる場合は、中央に圏点を付す。

チン・ポロウッチー（立身出世の事）　чинъ получи́лъ

次のような珍らしい合書がみられる。

フツルト（火口）　тру́гъ

ポツロイ（口ヲ吸［以下略］）　поцѣлу́й

前者は тру́- がフツル、後者は -цѣ- がツで表記されているわけであるが、他書に例がない。ца の音を示す場合ツサが用いられるが、この合書は他書にも頻繁に現われる。

特殊な文字はセが現われるが、これも他書にみられる。しかし次の例にみられる小書きのへは何を意味するのであろうか。他書では未見である。（読みは省略）

ウエ^テラ（嵐）　вѣ́теръ

コ^サツ（鮫）　коса́тка

デ^ヒデ（一帖紙の）　де́сть

ヲッツセリナザ^テ（是より帰る）　отсе́ль наза́дъ

ゴロンニ^チ（町奉行）　городни́чій

このうち後二者は次のような表記も本書中に認められる。

ナザーテ（返ス）／ナザアデ（戻）　наза́дъ

ゴロンニイチ（奉行）

したがってへの小書きは引呼を示す記号ということになる。ロシア語からもこのことは支持され、第一・第三の例は引呼とみられる。ただし第二の例は、同じ表記が他にもみられ、矛盾するが、理由は不明とするしかない。

以上まとめると、『魯西亜辨語』では引呼は〈|〉を用い、促呼はツの小書きで示す。合呼は二字の右側に傍線を引く。への小書きが現われるが、引呼を示すか。由来は不明である。

(3)源有撰『魯西亜文字集』[注18]は凡例末に寛政八年（一七九六）と記す。内容は次のように種々にわたる。巻末より巻首に左から右へと書かれる。（泉石本の例あり。）

(1)魯齊亜囡アズブキ字體　(2)蠻語五音　(3)子メソ(ママ)國之文字　(4)（ロシア文字による）以呂波・五十音・濁音脣音　(5)魯西亜分國五十二夷　(6)四大洲蠻語　(7)光太夫彼國ニ漂流ノ内之懇意高名之者姓名官名地名　(8)イルコウツカ寺舘之名　(9)僧都坊官ノ大概　(10)魯西亜金銀銅錢之圖　(11)七瓏　(12)黄道十二宮

ロシア文字・綴りは多くが片仮名で読みが与えられている。とりわけ(7)そして(6)では原語の綴りの上に読みが付されている。しかしながら問題とする表記につき、凡例には語るところがない。実地に検すると、引呼は〈|〉を用い、促呼はツの小書きで表わし、合呼は当該二文字の右側に一重の傍線を施す。左側に傍線を施す例がごく少数みられる。示されたロシア語・示された読み・説明の順に例示する。読みは左から右に書かれている。（ロシア語アクセントのみ筆者。）

Кохъ	コ|ハ	姓
Купе́ць	クッペ|ツ	商人
Па́вел	パウエ|ロ	諱

地名・人名の場合は、合呼の〈|〉の使用は少ない。и を含む綴りをツソとするのは『魯西亜辨語』と共通する。

Воронцо́въ	ウヲ|ロツソ|フ	姓名

他にフア（фа）・クワ（ква）・ドロ（дрь）・デレ（дре）などの合字がみられる。

(4)鈴鹿市所蔵『魯西亜詞記』[注19]は〈魯西亜国通辞〉と題する和魯小語彙集を主とする小本であるが、磯吉に関わるものと考えられる。磯吉は、寛政十年（一七九八）十二月十八日から翌年一月十七日まで許されて帰郷がかなった。その折に作成あるいは筆写されたものか。本文を検すると、引呼に〈|〉を用いるが、例が少ない。促呼は小書きのツを用いない。合呼は当該二字の右に一重の傍線を施すが、落ちている場合が割合多い。

ウ|タラ　（今朝）　ýтро

シタラツハイ　（料理場）　стря́пай

＊ стря́пай は стря́пать（料理する）の命令形二人称単数。

シイウエリ　（北）　сѣ́верь

(5)ここで長崎通詞にかかわる資料のひとつをとりあげる。志筑忠雄（中野柳圃）訳・ケンペル（Engelbert Kaempfer）著『鎖國論』である。本書はケンペルの『日本史』（*The History of Japan*, 1727）の蘭訳本（*De Beschryving van Japan*）附録中 Orderzoek を享和元年（一八〇一）に翻訳したものである。日本が鎖国することの可否を論ずる。

訳例末に〈作噩之歳鳥来月既生魄〉すなわち〈享和元年辛酉八月十七日〉の年紀を有する写本の影印本[注20]によって、以下記述する。〈譯例〉中に次のようにある。（句点のみ付す。）

一　彼方の字は音のみありて義なし。我等が國字のことし。故に我國の人名地名等皆其音を以て記せり。今是書中地名人名の類を記するに或ハ本字を以し或ハ國字を以する。［以下略］

一　常の文は平假名（ヒラカナ）を用ゐ蘭語蘭音は片假名（カタカナ）を用う。前後と紛乱せざらんが為なり。

かくあるのみで、問題とする表記にかかわる条文は存在しない。本文に即して結果のみを記せば次の通りである。す

なわち引呼は長音符〈ー〉で、合呼は当該二文字の左側に傍線を施すことで表示する。促呼はふつうの大きさのツを用い、小書きのツあるいはこれに代替する記号は見あたらず、無しとみられる。いうまでもなく、前二者はすべて統一的になされているわけではない。（例末にオランダ語を付す。）

ビール　bier
マルキユスポーリユス　Marcus Paulus
ヤツパン　Japan

特殊な片仮名としてカキクケとラルレが現われる。

ノアク　Noach
ヒルキリユス　Vergilius

＊前者の注に校注者は〈「ク」に半濁点は、chのいわゆる無声軟口蓋摩擦音を示す〉とし、後者については〈片仮名でLとRを区別するための工夫〉とする。

前者のクは〔x〕、後者キの子音は〔y〕である。後者のルの子音は〔r〕である。オランダ語に特有な音、日本人が混乱しやすい〔r〕と〔l〕の明瞭な区別を示している。

この『鎖國論』においては、合呼が左傍線で示されることに注意したい。この方式は『魯西亜語類』のそれと同じである。この方式が長崎通詞たちにあっては、ひとつの方式として確立存在していたことをうかがわしめる。左側に傍線を施すのは、漢文の解読等に用いられる右側の傍線と区別するためであったのではないか。しかしたとえば語彙集等もっぱらロシア語を扱う本文であれば、混同の恐れもなく、書きやすさも手伝って、右傍線と変じたのではなかろうか。仮説である。

以上の一群の資料では、合呼を当該二文字に傍線を付すという点で共通する。傍線ははじめ左に、のち右に施した。合呼はツを小書きするものと、しないものがある。引呼は長音符〈ー〉を用いる。ただし一資料で、への小書きによって示すと推量される例が若干存するが、その正確な形と由来は不明である。

新しい展開　さいごに従来とは異なる新しい展開をみせる資料について触れる。

光太夫らのロシア語とは直接かかわらないが、村上貞助に関係する旧市立函館図書館所蔵『松前幽囚控』[注21]に言及する。巻末近くに〈年号本邦文化十癸酉年魯西亜千八百十三年〉とあることから、成立を文化十年（一八一三）としておく。本書の詳細については別稿に譲るが、ここでは問題とする表記方式について述べたい。本書は主たる部分は和魯語彙集であり、別掲する海事用語を含めて五五〇ほどのロシア語が片仮名書きで示されている。日本語頭字のみによるイロハ順に見出し語が配列されている。

本書をこれまで見てきた引呼・促呼・合呼の方式で眺めてみると、次のようになる。引呼の長音符〈ー〉が用いられることは数例しかない。

針の事	ヱゴーカ	ИГО́ЛКА

促呼をあらわす小字のツの使用も少数である。

やわらか	ミヤッコイ	МЯ́ГКІЙ

右傍線で示される合呼は多数みられる。

星	ズウヱズダ	ЗВѢЗДА́

しかしながら右傍線の付された例を仔細にみてゆくと、従来の合呼とは異なっていることがわかる。従来の引呼や促

呼をも右傍線の表示中に含めているのである。

砂	ベソヲカ　песо́къ
旗の事	フラァカ　фла́гъ
口論	バラニッツア　брани́ться

本書の冒頭に次のような前置きがある。（句点のみ付す。）

此書ものを御讀之御方は仮名の肩に　○　―　〻　右丸棒濁三つ有之候処は得与御氣附可被成候。左様無之候而は一向に相分り不申候。

仮名の肩に付した。―〻の三つの記号は重要で、これらが付されたそれぞれの音で発音しなければ、全くロシア語が通じないの意であろう。[注22]（事実三つの符号は目立つように書かれている。）ここにロシア語の表記に対する従来の態度が一新されている。すなわち、これまでは耳慣れぬ聞いたロシア語をいかに近似的に表記するかといういわば受動的な姿勢に終始していたわけだが、ここに至ってロシア語をどう発音するかを指示する能動的な姿勢に転じているのである。むろん実際にロシア人を相手に話さなければならないという環境の一大変化に連動していることは言うまでもない。[注23]

本書にはキ゜セ゜ト゜の仮名がみられる。キ゜は次の一例のみ。キ゜は清音であることを示すのであろう。

そふさ	カキ゜ジヤ　ка́къ же

セ゜はこれまでとは異なり、теやчеの表記にも用いられる。

硝子	スセ゜クロ　стекло́
人	セ゜ロウヱガ　человѣ́къ

従来のようにцを含む音にあてられる例もあるが、単にツで表記する方が多い。

寺	セルコヒ	це́рковь
日	ソンツア	со́лнце

トも一例のみ。一度ドとしたものに。を上書きして。トとしているゆえ、清音を表わすものと考える。

壺	トヲス	ту́зъ

＊ ту́зъ は骰子やトランプの1（ピン）。

さらに次のような例に注意されたい。

クシヤミ	チハヨ（ウク）	чиха́ю
砂糖	サハラ（ウク）	са́харъ
剃刀	ベレトハ（ノム）	бри́тва

前二者右傍注はこのハの音が軟硬蓋摩擦音〔x〕であることを指示する（全3例）。後者の右傍注は〈呑み込むように発音せよ〉すなわち内破音の閉音節であることを指示する（全1例）。ともに日本人には不得手の音である。少数ではあるが、かかる仮名の右傍注は、前述の前置きと軌を一にする能動性の発揮とみてよい。本書では従来の表記法もふまえた上で、さらに日本人が実際にロシア語を発音するという目的にそって、符号や注が付されていることは、了解できるであろう。受動から能動への展開と評したゆえんである。

おわりに　本稿では、『北槎異聞』でとくに引呼・促呼・合呼に関し、用いられた表記の方式にはどのような先例があり、また後に受け継がれているかを、前後するいくつかの資料に沿って検討してみた。その結果、これらの資料は

合呼の表記で当該二つの仮名を合書するグループ（A群）と、当該二つの仮名に傍線を施すグループ（B群）の二群に分かれることが判明した。また引呼・促呼はA・Bに共通する場合が多い。しかし、(1)『北槎異聞』では引呼は当該の仮名に傍線を付すこと、(2)『北槎聞略』と『新製地毬萬國圖説』では促呼は字下に右寄せの横点を施す、ただし前者は〈ˉ〉、後者は〈ˇ〉の形である。（この二書は桂川甫周の作である。）(3)さらに『魯西亜辨語』では、引呼の表記と推定される〈^〉（右寄せ小書）を付する例が若干存する。これらのうち(1)と(3)はその由来、先例がつきとめられなかった。

本稿でとりあげた種々の引呼・促呼・合呼の表記方式は、第一には前野良沢によるところが大きく、もともと長崎通詞での伝統に従うところが明らかになった。筆者には横点の〈ˉ〉が清の訳家に、〈|〉が長崎通詞に先例を有することを知ったことはかけがえのない収穫であった。

A・B二群につき表にまとめると、その大概は次のようである。年代順に示す。

＊○は片仮名一文字、○は同小書一文字。囲みの四角形は中の文字が合書で示されていることを表わす。小書きは左寄せか右寄せか、傍線は左側か右側かに留意せよ。

A群

	?	一七八二	一七八六	一七八七	一七九三
	和蘭訳文略	輿地圖編小解	新製地毬萬國圖説	紅毛雜話	北槎異聞
引呼	○ー	（ー用イズ）	○ー	○ー	○
促呼	○‐	○ッ	○、	○ッ	○ッ
合呼	◎	◎	◎	◎	◎

	一七九四	一七九四	一七九八
	北槎聞略	魯西亜寄語	類聚紅毛語譯
引呼	○ー	○ー	○ー
促呼	○‐	○ッ	○ッ
合呼	◎	◎	◎

B群

	一七九二	一七九六	一七九六	一七九八	一八〇一
	魯西亜語類天理本	魯西亜辨語	魯西亜文字集	魯西亜詞記	鎖國論
引呼	○ー	○ー ○へ	○ー	○ー	○ー
促呼	○ッ	○ッ	○ッ	○ッ	○ッ
合呼	○○	○○	○○	○○	○○

A・B両群で用いられた表記の方式は、漂流民の記憶するロシア語をいかに片仮名で近似的に表記するかという試みであった。その後、時が移り、日本人がロシア語を話さなければならない状況に立ち至って、従来とは異なる方式が要請され実施されてゆくことになる。以上、こうした流れの一端を素描してみた。

現代日本語の外来語の片仮名表記が確立する以前に、様々な試みがなされたことは、きわめて興味深い事実といわねばならない。

注

1　国立公文書館内閣文庫所蔵。函架番号一八五―二三四。全四巻四冊。寛政五年（一七九三）成立。次の書に集録される。（イ）大友喜作編、北門叢書第六冊『北槎異聞・北邊探事』昭和十九年、北光書房。（ロ）山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集』第二巻、二〇〇三年、日本評論社。（ロ）には巻第四〈魯西亜語〉を影印でのせる。（ただし文字のある葉のみ。ない場合は省略。）しかしながら、（イ）は編者所蔵本に依り、本文に誤字が多く、（ロ）は翻刻の細部に資料として処理に問題があり、影印でも片仮名文字・記号等の確認が難しい場合があり、注意を要する。

2　『北槎異聞』巻第四について――序論と片仮名書きロシア語の表記法――〉「明治大学教養論集」通巻五七二号、二〇一三年九月。参照：同〈『北槎異聞』巻第四〈魯西亜語〉片仮名書きロシア語索引〉「明治大学教養論集」通巻五六七号、二〇一二年十二月。

3　国立公文書館内閣文庫所蔵。全二十四冊。寛政六年（一七九四）成立。本書の影印本である次の書を適宜参照した。杉本つとむ編著『『北槎聞略』―影印・解題・索引』早稲田大学出版所、一九九三年。参照：岩井憲幸〈『北槎聞略』巻十一〈言語〉片仮名ロシア語索引〉「明治大学教養論集」通巻五五一号、二〇一〇年一二月。

4　前稿（注2）の〈片仮名の表記法〉の節の末を参照せよ。

5　明治大学図書館蘆田文庫所蔵。函架番号〇九一・六／二／H。全一冊。参照：〈前野良沢編『輿地圖編小解』（翻刻）〉「明治大学人文科学研究所紀要」第四十九冊、二〇〇一年三月。

6 明治大学図書館蘆田文庫所蔵。函架番号二九〇・一／五八／／H。全一冊。参照：〈桂川甫周訳・大槻玄澤校『新製地毬萬國圖説』（翻刻）〉「明治大学人文科学研究所紀要」第五十一冊、二〇〇二年。

7 国立国会図書館白井文庫本。国立国会図書館デジタルコレクションによる。なお、杉本つとむ解説・注『紅毛雑話・蘭説弁惑』（八坂書房、昭和四七年）も参考とした。

8 題言の引用は、参考文献の第三巻（昭和五三年）五一一、五〇九ページの写真による。

9 杉本つとむ編著『蛮語箋』皓星社、二〇〇〇年。

10 国立公文書館内閣文庫所蔵。函架番号一八五―二七一。全一冊。

11 松村明〈幕末期ロシア語学習書についての覚書〉「文学・語学」第三十三号、昭和三十九年九月。（のち『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版、昭和四五年、所収。）山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集』第二巻（日本評論社、二〇〇二年）〈解題〉中〈寛政五年神昌丸二漂民両目付吟味録〉の節末尾。

12 天理図書館所蔵。函架番号〇八一・イ五三・八―一―二六。影印は河合忠信編校『魯西亞語類』私家版、昭和六十年。翻刻は石川真弘・大内田貞郎・金子和正・木村三四吾〈業餘稿叢六　魯西亞語類〉天理図書館報「ビブリア」四五号、昭和四五年六月。参照：岩井憲幸〈天理図書館蔵『魯西亜語類』について――その写本系統上の位置と特徴――〉「明治大学教養論集」通巻二四七号、一九九二年三月。同〈『魯西亜語類』本文露和索引〉「明治大学教養論集」通巻四四三号、二〇〇九年一月。

13 鷹見泉石旧蔵。資料番号B一一。全一冊。参照：岩井憲幸〈鷹見泉石旧蔵ロシア語関係資料若干についての覚書〉古河歴史博物館紀要「泉石」第一号、一九九〇年十一月。同〈古河歴史博物館蔵『魯西亜言語集』の特徴と価値〉「明治大学教養論集」通巻五四九号、二〇二〇年九月。

14 洋学文庫所蔵。函架番号、文庫八・C八四二。勝俣詮吉郎旧蔵。参照：岩井憲幸〈『魯西亜語覚書』について〉「早稲田大学図書館紀要」第十七号、昭和五十一年三月。本書を、光太夫の自筆本とするむきがあるが誤り。

15 注13岩井六〇、五九ページ写真参照。

16 泉石はレザノフがもたらした「ロシア帝国図」を文化二年（一八〇五）に写しているが、本体はむろん、他人では省略されるのが普通だったカルトゥーシュ付近の細かい図柄まで精密に写しとっている。（「魯西亜国地図」H八九二。）ロシア語に関するものでは、ロシアの習字帖を写したものがあり、タイトルページでは標題とこれをとりまく図柄が細密に透写されている。

〈「魯西亜国字学」B二一〇〉。影印は次を見よ。岩井憲幸〈文化一〇年、鷹見泉石写『魯西亜國字學』〉「明治大学教養論集」通巻五〇〇号、二〇一四年九月。

17 国立公文書館内閣文庫所蔵。函架番号二〇七―四四七。二冊。影印は亀井高孝・村山七郎・中村喜和編著『魯西亜辨語』近藤出版社、昭和四十七年。

18 国立公文書館内閣文庫所蔵。函架番号二〇七―四四八。一冊。影印は亀井高孝・村山七郎編著『魯西亜文字集』吉川弘文館、昭和四十二年。

19 鈴鹿市所蔵。一冊。影印は次の小文中に掲載。岩井憲幸〈大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究〉「明治大学人文科学研究所紀要」第六八冊、二〇一一年三月。参照：岩井憲幸〈鈴鹿市所蔵『魯西亜詞記』翻刻〉「明治大学教養論集」通巻四五七号、二〇一〇年九月。同〈鈴鹿市所蔵『魯西亜詞記』語彙集部分について〉同上通巻五四四号、二〇一九年十二月。

20 杉本つとむ『志筑忠雄訳『鎖国論』――影印翻刻・校註――』八坂書房、二〇一五年。

21 市立函館図書館所蔵。函架番号〇〇八八〇・〇八二・三〇〇一。一冊。参照：注11松村明。岩井憲幸〈市立函館図書館蔵『松前幽囚』ゴロウニン口述露語控』―附翻刻―〉「明治大学教養論集」通巻二三七号、一九九一年三月。

22 前注21岩井論文中、前置きの最終条を誤って解釈した。今訂正する。

23 文化八年（一八一一）ゴロヴニンらが拿捕され、箱館奉行所に囚えられた。文化十年（一八一三）に釈放されるまで、箱館奉行所の村上貞助ら、さらに江戸から派遣された馬場佐十郎らは、ロシア人に直接ロシア語を教授される機会を得た。この機会が日本のロシア学の水準を急激に上昇させた。一大転期というべきである。ロシア語の教授はムールが熱心だったようである。参照：ゴロヴニン著、井上満訳『日本幽囚記』上・中・下、岩波書店、昭和二一年。日本ロシア文学会編『日本人とロシア語――ロシア語教育の歴史』ナウカ、二〇〇〇年。

参考文献

杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅰ～Ⅴ、早稲田大学出版部、昭和五一年―五七年。

（いわい・のりゆき　名誉教授）